









遠野の住まいのこと・子育てのこと



2016年から遠野に移り住み、ローカルプロデューサーとして活動する富川 岳さん。富川さんが対談相手として選んだのが 大橋先生(大橋進さん)です。ふたりの接点は遠野に伝わる逸話や伝承を配した説話集『遠野物語』。遠野物語の魅力を 可視化するプロジェクト「to know」に取り組む富川さんは顧問を務める大橋先生のことを「師匠」と呼びます。インタ ビューでは、ふたりの強い信頼感、関係性を感じながら、おふたりの出会いやこれまでの活動についてお聞きしました。

おふたりの出会いのきっかけを教えてください

- 富川 侯が遠野に移住して1年が経つ頃に、『遠野物語』をテーマにしたプロジェクトに取り組みたいと考えて、地元の方から 「遠野物語について活動するなら」と大橋先生を紹介していただいたのがきっかけです。 初めてお会いしたのは2017年の1月でしたね。
- 大橋 会う前に、富川さんは地域おこし協力隊をされている方だと聞いていたので、すでに遠野のことは知っていて、遠野物語 も読んでいるものだろうと思っていたんですよ。でも実際に会って話をしてみたら、遠野物語に関する知識はまったく白 紙だった。最初はびっくりしたんですけど、むしろその方がいいのかなと思って。富川さんの質問に答える形で、遠野物語 について説明しました。
- **富川** 最初は本当に白紙でした。でも先生から遠野物語の概要やできた背景をお聞きしたら、とてもおもしろくて。それから 定期的に勉強会を開いていただくようになりました。
- 大橋 勉強会を開く度に、富川さんの遠野物語への関心度が高くなっていましたね。何より素晴らしいのは、私の説明したことをわかりやすく図式化して、新しい資料をつくること。私がそれまで作っていた資料もヒントにはなっているんだけど、それを超えてくる資料ができるんですよ。前職がそういう仕事してたということを、私はよくわからないので驚きましたね。
- 富川 そうなんです。前職では企画書ばっかりつくってましたからね (笑)
- 大橋 で、そうして勉強会を重ねながら、その年の夏に初めてフィールドワークの企画が始まって。富川さんのネットワークで、 県外の方がたくさん遠野に訪れてね。
- 富川 その時に、今「to know」として取り組んでいる活動の原型になるアイデアができてきましたね。
- 大橋 私が富川さんから教わったのは、何も知識がなくても、まさに適野物語の序文にある通り、「感じたるまま」に読むという姿勢です。適野物語は、人それぞれ自由な感じ方で触れるのがいいんですよ。
- 富川 先生の説明の仕方がとてもよかったんです。大橋先生は、フィールドワークを大切にされていて、かっぱと出会った場所とか、山の神とすれ違った坂道とか、実際に物語の舞台になった場所を廻りながら説明してくれるんです。 やっぱり現地に行ったらテンション上がるんですよね。

- 大橋 うんうん。思いつきだけど、今 to know で行っているツーリズムのように典型的なコースを回るのもいいけど、一人ひとりが行きたい場所を聞いてガイドするっていうのもいいね。それが最高じゃないかなって思うんだよな。
- 富川 たしかに参加者にコースを委ねるのもいいですね。やっぱりそういう自発的な意欲を大切にしたいです。

大橋先生は、富川さんの普段の活動を見て感じられていることはありますか?

- 大橋 前職は広告代理店だったとか、最近デザインの賞を受賞したとか、僕はこの人のすべてはわかっていないんですよ。 でも一番の心配事であり、関心事としてあったのは地域おこし協力隊の任期が終わった後も、遠野に残るのかということで。 だから残ることを聞いたときは、びっくりしましたね。ああ、本気だなって。
- 富川 仕事は何とかつくっていこうと思いながら、やっぱり一番は遠野物語が大きいんじゃないかと思います。知り始めてまだ 2,3 年で、知れば知るほど世界が広がっていくから、調べないといけないことがたくさんあって。ちゃんと時間をかけて、 関わっていきたいなと考えました。
- 大橋 富川さんを見ていると、既成概念にとらわれずどんどん進んでいく青年だってことが本当によく伝わる。それはやっぱり押し付けられて何かをしているんじゃなくて、自分で何かを目指しながら取り組んでいるからこそだと思います。
- 富川 大橋先生と出会っていなかったら、遠野に残っていても、自分は何をしていたんだろうなって思うんです。今ほど遠野に関する 考え方を終てていなかったと思うし、土地の文化・歴史にのめり込めていなかったんじゃないかな。本当にいい出会いでした。
- 大橋 まあでも、まだまだこれからだよ。

富川 はい、そうですね (笑)



<プロフィール>

大橋 進 おおはし すすむ

1943 年 10 月生まれ。岩手県遠野市在住。to know 顧問。元高校教員。元遠野物語研究所副所長。

富川岳 とみかわがく

1987 年 1 月 19 日生まれ。新潟県長岡市生まれ。ローカルプロデューサー。(株) 富川屋 / to know 代表。東京の広告会社を経て 2016 年に遠野に移住。Next Commons Lab 立ち上げを経て独立。企画・デザインを生業とする。また、師・大橋進氏との戦慄的な出会いから『遠野物語』に傾倒。民俗学をテーマとしたスタディツアーや商品開発、デザイン、教育機関と連携した取り組みを行っている。



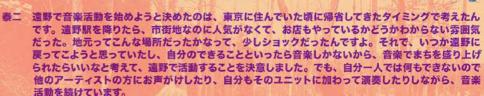


ドラマーとして、遠野市で音楽活動を行っている菊池泰三さん。泰三さんが対談相手に選んだのは、岩手県 盛岡市を拠点にジャズビアニストとして活躍する鈴木牧子さんです。泰三さんにとって、牧子さんは「ミュー ジシャンの楽しみである、音楽活動への刺激」を与えてくれる人。ふたりが取り組むジャズの音楽性や地域 での音楽活動について、じっくりお話していただきました。

おふたりの出会いのきっかけを教えてください。

- 泰二 実は知り合う前から一方的に牧子さんのことは知っていて。すごいピアニストの方だなと思っていたんです。いつか一緒に演奏できたらいいなと思いながら、まあ無理だろうなってひとりで考えたりして。でも、ある日出会うタイミングができて、お話してみたら、通っていた専門学校が同じグループだったり、時期は違うけどお互い東京で音楽活動をしていた時期があったりして、共通点がいっぱいあった。お話すればするほど、素晴らしい音楽性と人間性が伝わってきて、より一緒に演奏したい気持ちが強くなったことを覚えていますね。
- 牧子 私も出会う前から、泰二くんの名前は聞いたことがあったんです。すごいドラマーだって聞いていて ね。で、さっき泰二くんが話してくれたような経緯でお会いした後に、共通の知り合いの遠野でバイ オリンを演奏している方を交えてユニットを組んだんです。
- 泰二 ずっと考えていたことが、実現できてすごい嬉しかったです。牧子さんと出会うまではジャズを演奏 する機会ってほとんどなくて。なので、一緒に演奏させていただきながら、刺激を受けて、たくさん 勉強させてもらっています。
- 牧子 私も泰二くんのファンになっちゃってね。私の計画では、これから少しずつ泰二くんをジャズの世界 に引っ張っていけたらいいなと思っています。
- 泰二 ジャズってきっかけがあっても、なかなか深く関わりづらい業界なんですよ。そこに牧子さんが連れて行ってくれてるんですよね。そのおかげで表現力や新しいジャンルに対応する感覚を身につけられています。やっぱり日々そういう刺激がないと、ミュージシャンとしての楽しさって半減すると思うんです。牧子さんはその感覚を実際に「こうしなさい」と口で言うんじゃないくて、一緒に演奏しながら音楽性で伝えてくれる。「がんばれ」って、ぽんと背中を押してくれるというか。
- 牧子 ジャズは、演奏中もお互いに感覚を読み取って、瞬時に判断することを繰り返しているんです。感覚をキャッチボールするというか。ジャズの面白さってたくさんあるけど、そうした言葉ではなく、音で対話できるところにあるんですよ。

泰二さんはなぜ遠野で音楽活動をされているんですか?



牧子 泰二くんは積極的に活動していて、とてもいいなと思います。活動していると、きっといろんなこと があるけど、それを怖がっていると何も進まないですからね。やってみてだめだったらもう一回やれ ばいいし。本当によく頑張っていると思う。

おふたりは遠野にどんな印象がありますか?

- 泰二 住んでいるとよくわからないんですけど、遠野にきていただいたアーティストの方には「特別な雰囲 気がある」とか「不思議な場所」だってよく言われますね。
- 牧子 遠野といえばやっぱり、妖怪。でもその妖怪が悪さをしているんじゃなくて、みんなを守ってくれて いる気がする。いい意味で孤立しているまちというか。秘密めいた雰囲気がありますね。
- 泰二 最近は遠野のまちが変わってきている実感があります。引っ越してきた、初めて会う人も増えた気がしますね。まちが動いているなって感じがします。
- 牧子 遠野って本当にいろんな可能性があるまちだよね。価値観に捕らわれず、縛りがないというか。
- 泰二 まだまだ発信できる遠野の魅力ってあるなと思っていて。そういった部分をいろんなジャンルの人達と交流して発信していけたらもっと遠野がよくなっていく気がします。

おふたりでこれから取り組もうとしていることはありますか?

- 牧子 私たちは表現者でありたいなと思っているんです。これからも泰二くんと一緒に、私たちだからこそできることを表現し続けられるといいですね。
- 泰二 もともと遠野でこんなに本気で音楽活動ができると思っていなかったので、牧子さんにこんな風に声をかけていただけてとても嬉しいです。本当にこういうご縁を大切にしながら、これからも活動を続けていきたいなと思います。

<プロフィール >

菊池 泰二 きくち たいじ

岩手県遠野市出身、在住。14歳に和太鼓の演奏をしていたことを、きっかけにドラムを始める。高校卒業後 Anmusic school でドラム実技を学び、卒業後ロサンゼルスに渡米し現地の音楽に触れ、様々なミュージシャンと共演する。帰国後プロとしての活動をスタート。アニメ・ゲーム音楽やバンドのサポートとしてライブ・レコーディング等に携わる。現在は、岩手を拠点にジャンルを問わず様々なバンド活動・イベントで活躍する他、遠野市内にて主に児童などに音楽の愉しさを教える為ドラム教室を主宰している。

鈴木 牧子 すずきまきこ

岩手県盛岡市出身、在住。桐朋学園短大卒業後アン・スクール・オブ・コンテンポラリー・ミュージックにてジャズピアノを弘勢憲二氏に師事。1996~98年まで自己のカルテットで横浜ジャズプロムナードやその他のコンテストで優秀賞三度受賞。2016年に1stアルバム「My Dear」を発表。翌年発売記念ツアーを新宿ピットインなどで行う。2018年、2ndアルバム「NEXT」を発表。オリジナル曲「BOKYO」がJ-W AVE のラジオ番組「WITH」のエンディングテーマに取り上げられる。2019年、盛岡おでってホール、新宿ビットインなど数箇所で発売記念ツアーを行う。



うちのお店はもともと母が最初にスナックをやっていて。母は大阪から引っ越してきて、昭和 47 年くらいにお店を始めたのかな。私自身は 20 歳から遠野市内の居酒屋で働き始めて、12 年前にスナックだったこのお店を改装して、居酒屋にしてからお店に立ち始めたって感じ。2007 年とか 8 年とかそれくらいだね。

この通りは、昭和50年代頃の週末やお盆、年末年始はもうみんな肩ぶつけながら歩くくらい人通りがすごかったんだよ。まあうるさかったもん。ほとんど地元の人たち。飲む以外に娯楽がないんだもんね。だから、このまちも全部のお店の看板が電気を点けてたの。今はもう半分くらいになってきたね。この通りの変化はよくわかるんだよ。だって、私はここでずっと育って、ここにしかいないんだから。

本当に外から遠野に来る人って地元に住んでいるとよくわからないんだよね。遠野以外のまちどこ行っても同じような気もするし。それなのに、遠野にフォーカス当てて来る人は奇特だよ。でも、ずっと住んでいる自分でもどんなまちなのか、まだ全部分かっていないところもあるからね。何回来ても新鮮なのはわかるから、興味があるならちゃんと見極めるまで通いつめる!って感じ (笑)。

本当に遠野物語の世界、マヨイガなんだろうね。



遠野に来た人たちは、幻想の世界に迷い込むようにして親不孝通りを訪れる。もちろん僕もそのひとり。まずは 親不孝通りの入り口にある De んがスタート。おでんと日本酒を味わいながら、パワフルなみすずさんと話して 確信した。僕はこれからこの「おいしくて、楽しい」通りにどんどん迷い込んでいくことになる。「興味があるな らちゃんと見極めるまで通いつめろ!」って、みすずさんの言葉を胸に刻みながら。



遠野の人たちはジンギスカンが好き。野外でバケツの上に乗せて焼いて食べたり、お肉屋さん毎に味が違うから人それぞれお気に入りのタレがあったりする。周りの影響もあってか、僕も遠野に引っ越してきてから、よくラム肉を食べるようになった。いつも買いに行くのは遠野駅近くの商店街にある「笹村精肉店」。最近、通う頻度が増えたからか、お店の人が「そろそろ飽きてきたんじゃない?」と声をかけてくれた。そこで「こういう食べ方もあるのよ」と教わったのが、オリーブオイルで焼く「ラム肉のステーキ」。早速家に帰って試してみたら、いつもよりちょっと贅沢な匂いのする、さわやかな雰囲気。いつも食べる食材が、ちょっとした工夫でもっとおいしくなるのは、とても嬉しい。遠野には、素材そのものの味がいい食材がいっぱいあるけど、きっとまだまだ知らないだけで、おいしい料理がたくさんあるんだろうな。遠野での生活はまだまだ始まったばかり。これからどんな料理に出会えるんだろう。



· 「世界初・! □ オ電 * ビーリー! 〜

ホップの里、選野市にあるマイクロプルワリー「選野醸造TAPROOM」。2020 年 3 月から、 食用コオロギを原料に使用した「コオロギビール / Cricket Dark Ale」を販売! コオロギビールは、遠野醸造と「地球を愛し、探究し続けるチーム」ANTCICADA が共同開発。 遠野醸造代表取締役の袴田 大輔さんと ANTCICADA 代表の篠原 祐太さんの出会いから誕生したビールです。 そうした人と人の出会いを通した、新たなビール造りに挑み続ける遠野醸造。 ここでしか飲めないビールを、みんなも味わってみよう! LET'S BEER TOGETHER!







空き家バンク

市内の居住可能な空き家・賃貸物件を紹介。空き家情報は「で・くらす遠野」のホームページで閲覧可能。



空き家リフォーム事業助成

空き家バンクに登録されている空き家をリフォームする際の費用の 1/2 を助成。(助成上限あり)



若年者定着促進家賃補助金

連野市に転入し、市内の事業所等に新たに就業した 45 歳未満の若年者が住む民間賃貸住宅の家賃 (2 万円以上) の 1/2 (上限 1 万 5 千円) を助成。※最長 36 カ月



子育でサポート

妊娠・出産・子育でに関する相談はこちら

・遮野市子育て世代包括支援センター (母子保健の総合相談窓口) (問い合わせ: 遠野市助産院「ねっと・ゆりかご」TEL0198-62-1103 または 1108)

元気わらすっこセンター

(問い合わせ: 遠野市こども政策課 TEL0198-62-0189)

遠野市ホームページ https://www.city.tono.iwate.jp/



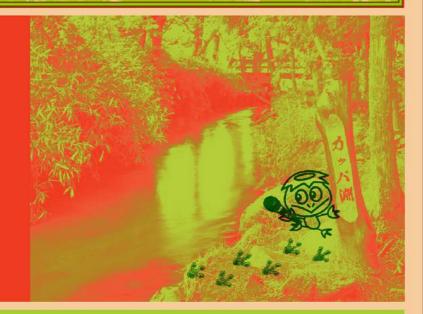
遠野市 WEB SITE



かっば漏縄集部(仮)

企画・プロデュース: 富川 岳 編集・執筆: 宮本 拓海 デザイン: 大川 寛樹

Special Thanks:
工房 木ばくりさん
米通 ハツさん
松田 彦治さん
松田 成人さん・由紀さん
大橋 進さん
大徳屋さん
菊池 泰子さん
De ん~ 隠れ家~さん
強野譲進TAPROOM さん
Chihiro Ogawa さん
Takuma Suenaga さん





KGR Harmony さん



-発行-で・くらす遠野事務局

〒028-0592 岩手県遠野市中央通り9-1 (遠野市役所本庁舎1階)

TEL: 0198-62-2111 (代表)

E-mail: info@dekurasu-tono.jp https://dekurasu-tono.jp